

小池光・加藤治郎・花山多佳子・米川千嘉子
気鋭の四歌人が輪番で執筆する特別企画

20世紀 歌人群像

間もなく21世紀。近代短歌から現代短歌へ…
短歌はこの一〇〇年でどのような足跡を
残してきたのだろうか。
この時代を生きた歌人にスポットをあてて
20世紀の短歌を検証する

（第一章） 人と時代

なかふみ 中城ふみ子は大正十一（一九二二）年、北海道帯広市に生まれた。北海道庁立帯広高等女学校を経て東京家政学院に学び、田亀鑑きたかみに作歌指導を受ける。同校を卒業した翌昭和十七年、札幌において、技術者であった中城博と結婚。十九歳であった。三男一女をもうける（次男は生後三か月で死亡）が、夫には女性問題や会社の資料を不正に売却して検挙されるなどのことがあり、二十五年、別居。翌年、二子を連れ正式に離婚。実家の洋品店を手伝うなどして生活。多くの恋があった。



16 中城ふみ子 米川千嘉子

歌人群像

昭和二十九年「短歌研究」四月号の五十首詠一位入選作に対

第二章 歌と時代

十代で短歌に出会っていたふみ子は、二十二年に「新壜」入社。翌年「辛夷」会員となり、二十六年には「新壜」同人、超結社誌「山脈」同人となるなど、いよいよ作歌に没頭し頭角をあらわしていった。のち、「女人短歌」「潮音」「凍土」などにも参加している。

二十七年、乳癌で左乳房切除の手術を受けるが、右乳房への転移が発見され、二十九年再入院、手術。その病床に、「短歌研究」第一回五十首詠一位入選の報がもたらされた。「もゆる限りはひとに与へし乳房なれ癌の組成を何時よりと知らず」「担はれて手術室出づるその時よりみづみづ尖る乳首を妬む」など、大胆に病と性愛に迫った入選作品が四月に発表されると、たちまち賛否両論の大きな反響がおこった。七月、歌集『乳房喪失』が出版されたが、癌はさらに肺に転移しており、八月三日永眠。享年三十一歳。翌年『花の原型』出版。

離婚、乳癌、不倫を含めたいくつもの恋愛、歌人として脚光をあびた最後の数か月、夭折。まさに花火のような生涯は、没後まもなく、恋人の一人であった若月彰の手記『乳房よ永遠なれ』に描かれて映画化。後年、渡辺淳一の小説『冬の花火』となる。ふみ子は特別に伝説化されてきた歌人でもあった。

東京家政学院の学友と。左、ふみ子



する歌壇の反響は、まず「ヒステリックで、身ぶりを誇張した」もの、「表現が大雑把」。「素材に中心をおきすぎ」るなど、否定的なものが多かった。写実的で穏当な世界に慣れ、ひたすら女性につつましきや清潔さを求めていた人々にとって、ふみ子の表現はいかにもショックで、多分に生理的な拒否反応を引き起こしたのである。とはいえ、そうした否定論の一方には作者の切実さや「ふかい悲哀」を認める意見もあり、歌集がことに若い世代の共感を得るに及んで、ふみ子は戦後女性短歌の原点として評価されていくことになる。しかし、それでもなお、スキャンダラスな女流歌人中城ふみ子像の根拠になるような作品に注目は集まりがちであった。たしかにそれらの何首かは、ふみ子を代表するものである。だが、それらのより深い理解のためにも、ふみ子の作品全体を同時代の社会と他の歌人の作品の中において見る視点が必要なのだろう。

『乳房喪失』には、戦後のまだ貧しい社会、必死でわびしい生活感情、戦後という時間に翻弄された夫の転落、父母、商売に^か関わる思いなどがうたわれている。「混血児が口尖らせて投げをりし石も沈みて眩しき水面」「一人あたり十円ほどの予算にてわれが得意とすキヤベツのいため煮」「シユミーズを盗られてかへる街風呂の夕べ



の激しい相似がある。『白蛾』の次のような歌を、ふみ子の歌とともに見てみたい。「われのもつ仮面のひとつあばき出し白蛾くるしみにそりかへりつつ」「一本の黒き傘となり夢の中にたれか立ちあみきたれをおびゆる」「月光にうづくまりをるわがなかのけものよ風に髪毛そよめかす」「未亡人といへば

ひつそりと月いでて居り」「アドルムの箱買ひ貯めて日々眠る夫の荒惨に近より難し」「懸引ののちに受けとり皺のばす紙幣に多少のをかしみはあり」など、かなり多様な戦後の題材や主題が積極的に、しかも的確にうたわれていることは注目されてよい。その上で、恋があり、病があり、病がもたらす壮絶な孤独があった。

ちなみに、ふみ子が歌壇に登場する前年に出版され好評を得ていた歌集に、森岡貞香の『白蛾』がある。戦後夫を失い、幼子を抱えた病身の生活という境遇の近さもあろう、森岡らの「女人短歌」にも参加していたふみ子が、その作品からさまざまなものを撰取しようとしたのはじつに当然だったといえるが、その上で両者の間には、表面上の撰取とか模倣といったのではおさまらない、自他への視点や態度、それに由来する表現の氣息

長女・雪子、ふみ子、三男・潔



側の情念を燃やした戦前の女性たちとはあきらかに違う。ともに、余儀ない生活と精神の自立を迫られ、世間の好奇の目との戦いのうちに生きねばならなかった女性の歌。自身と社会を見つめて仮借ない厳しい視線が、これまでになく鮮明な女性の自画像を可能にしている。当然、女性という性を生きる自己、その身体についてのこだわりも強く、表現に躊躇がない。まだ混乱おさまらぬ戦後を一人病身で生きる不安や恐れ、精神の暗部への執着は、従来の女性的な気分や情緒の世界とは違ったかたちで、想像的イメージや感覚世界を鋭く深化させているのである。

では、『白蛾』にはない、『乳房喪失』の特徴は何か。先にも述べたように、商家に生まれ、離婚後は自身も店を手伝うという環境のなかで、戦後の庶民生活や生活感情に注目した歌が多いこと。多くの恋。より絶望的な病との孤独な戦い。そしてもう一つ、朝鮮人、アイヌの人々、混血児、駐留米軍兵士など、当時の日本人から特別の目をもって見られた人々に注意深い目

妻子のある男がにこりしまなこひらきたらずや」「ブラジャーは汗あえ夫の墓を洗ふすべて画然と秋の陽の中」「流弾のごとくしわれが生きゆくに撃ちあたる人間を考へてゐる」。これら森岡の歌もふみ子の歌も、家制度のなかで縛られ守られ、そのことを感傷し、内

をむけた多くの作品があることである。単なる同情ではない。生きるための狡猾さなどもしかと見届けつつ、「血漿を含む北風の野に立ちてわが掌ひらけば石のやじりあり」など、偏狭な日本の共同体社会に虐げられつつ、その偏狭を告発する同じ人間の側にあるとふみ子は自分を意識している。そのことを見過すことはできない。そしてふみ子の恋も、性情の奔放さや短い命の燃焼を願ってというだけではなく、世間の偏狭さや不自由を告発し、それに挑戦してゆく体当たりの行為そのものでもあったのではないだろうか。それがしばしば「思わせぶり」と見られる誇張になり、時には露悪的な表現をも求めさせるのである。難解派として非難された葛原妙子が、「再び女人の歌を閉塞するもの」において、戦後の女性に「乾燥した、又粘着した醜い情緒がある」と述べ、『乳房喪失』については「一人のエゴイストチックな女性の、鮮烈な生き方をとほして、それは如実に戦後社会を反映してゐる」「混沌の中の人間の生き方の模索、それを象徴するもの」であるとはつきり評価したのは、じつに正しかった。具体的に歌を見ていこう。

出奔せし夫が住むといふ四国目とづれば不思議に美しき島よ

「乳房喪失」(以下同じ)

夫への憎しみもなつかしさも綯い交ぜの心を澄ますようにふみ子は目を閉じる。目蓋の裏の海に浮く小さな四国——。不思議に濁りのない悲しみがにじむ歌だ。ふみ子においては、夫と恋人たちの歌で、少し印象がちがうのが興味深いところで、数年ではあるが、三人の子のいる家庭を築こうとした時間、生活

● (中城ふみ子)

の折々の思いは、夫の歌をより現実的にしている。その行方もはじめから見えているようでありながら、ひたすら激しさを求めた恋の記憶ではない。夫に裏切られた傷の痛み、それが癒えない自身の弱さをみずからに許している悲しみが、この一首を美しくしているのではないか。

春のめだか籬の足あと山椒の実それらのもの一つかわが子

明るいイメージと愛唱性にとんだ歌だ。さまざまな子供の歌は、より素直にふみ子の視線の多様さと表現の幅を感じさせる。離婚して新しい恋人のいる母をどう子は見ているかといった歌のほか、「スクーターの後ろに乗りし子が下さるときに荷物の表情をせり」や「公園の黒き樹に子らが鈴なりに乗りておうおうと吠える夕べ」などには、子供への距離ある対象化が見える。昭和二十年代以降の女性がさかんに開拓していた部分だ。

灼きつくす口づけさへも目をあけてうけたる我をかなしみ給へ

情熱的な口づけのさなかも、恋に溺れることのない悲しみ。その呼び掛けは、君に対して、自身に対して、あるいは世間に対してであるかもしれない。自己への冷静な視線そのものよりも、それをどこか映画的なポーズによってくつきりと外側にアピールする挑戦的なまでの激しさが印象的である。「捌かるる鞭なきわれのけだものはしらしらとして月光にとぶ」「跳躍の姿勢にけものは待ちゐたり屠られむとし我は近づく」などの歌にも

共通する挑戦的な響きはふみ子の恋の歌の特徴の一つだが、それは「板の間に足指重ねて坐るとき不服従なるわれの姿よ」や「出戻りのわれが動くにそこはかと立つ埃さへ目に糺さるる」というような、いまだ制度に縛られていた戦後の女性の窮屈さを自身の中にさえ聞いていたふみ子の、社会と自分への挑戦でもあったのだ。同時にふみ子は、激しく求めつつ、しかしほとんどその恋の行方を信じていなかったようにも思われる。

プレッソウダの泡のごとき唾液もつひとの傍に昼限りなし

前掲歌のようなニヒル（虚無的）な歌の一方にある恋の歌。「背のびして唇づけ返す春の夜のころはあはれみづみづとして」などとともに、大胆にしてのびやかな、そして愛唱性にとむ代表作である。身体や性の表現の大胆さがすでに消化されきった現代の目には、むしろ一氣にうたいおろした健やかさと無駄のなき、明るい映像性が印象的だ。

唇を捺されて乳房熱かりき癌は嘲ふがにひそかに成さる

ふみ子にとって、乳房は子に乳を与えたものではなく、かな



学院のお別れの夜。後列左端がふみ子

らず男性に与えたもの。性愛の記憶とともに失った乳房があった。思えばあの抱擁のさなか、それを嘲笑うように癌は刻々と乳房を侵していたのだ——。性愛と組み合わせられたことで、その生々しい熱ささえ喰いつくして増殖していくような癌の冷酷さが浮かびあがり、同時にそういう冷酷さに見つめられることよってふみ子の恋の挑発性が、一種悲劇的な輪郭の濃さで印象づけられることになる。中城ふみ子という歌人像を象徴する一首。

スリツパの濡れたる音を引く老婆憎めば老婆とも繋がれてゐる

病に対して率直に弱音を吐いた歌はあまりないが、夜の病床の絶望的な孤独と死の予感、何度もうたわれている。これもある夜の病棟。病む老婆の不吉な孤独な足音を、ふみ子は憎み忘れようとする。しかし、あの不吉な孤独は誰のものでもない、自分のもの。表現者としてのふみ子はなお強靱だが、心象はふるえるように痛ましい。

子が忘れゆきしピストル夜ふかきテーブルの上に母を狙へり

死が迫っていることを意識した頃の歌。ひととき枕辺にいた子供の忘れ物、玩具のピストルが自分を狙っているようだといふ。そこには死の予感があるだけでなく、恋を重ねる自分を断罪するような子の視線が重ねられてもいよう。自意識や精神の暗部への鋭敏な神経は、同時代の女性歌人に共通するが、ふみ



子の場合はその歌や「失ひしわれの乳房に似し丘あり冬は枯れたる花が飾らむ」のように、しばしばアイロニカル（皮肉）で劇的な構図で鮮明に定着させた。

第三章

短歌史におけるポジション

ふみ子が登場する数年前から、「短歌研究」は塚本邦雄くにおらモダンニズム短歌の特集を行い、また女性歌人の作品に積極的に光をあてていた。そうした「短歌研究」編集者中井英夫の新しい短歌への意図に合致する歌人として、斎藤茂吉もきち、釈道空しやくどうくうなきあと、の歌壇に新しい風を吹き込むべき新人にふさわしい歌人として、

まさに中城ふみ子が現れたのである。述べてきたように、ふみ子は戦後の女性にとりまく制度や社会の窮屈さを意識しつつ、自分に対しても、世間に対しても、したたかに見開いて激しくうたった。その迫真性や精神の暗部への視線などは、森岡貞香や葛原妙子など同時代の女性の表現に共通するもので、昭和五十年代以降の女性短歌に繋がる一本の道筋が見える。わけても

● (中城ふみ子)

ふみ子は、感覚そのものをメタフィジック（形而上学的）な方向に深化させるというのではなく、より大衆的で無理のない明確なイメージ、身体性や映像性をもつ表現に生かしてゆく方法にすぐれた。そしてそうした個性が自己像に関わるかかるとき、ふみ子の「われ」は社会や制度にアピールする「抵抗体」として、誇張され、鮮やかに劇化されたのである。河野裕子かのゆりこの「われを呼ぶうら若きこゑよ喉ほとけ桃の核ほどひかりてゐたる」におけるのびやかな恋の主張と身体的表現、阿木津英あきつえが「風蹴りてスカート裾広くゆく尊ばれたる女はありや」とうたった、女性である自己を鮮烈な抵抗体として提示する世界。対照的で共々大きなスケールをもつこうした女性の歌のなかに、脈々と生きる中城ふみ子がいる。

また、ふみ子には虚構による観念的テーマの実現や、虚構の「私」などについて、いまだ方法的な自覚があったとはいえないが、イメージ明確で劇的な一首の構図、それによってアイロニカルな批評性やメッセージ性をもつ作品において、塚本邦雄や寺山修司しゅうじに共通する領域を持っていた。そういうものが一人の戦後女性のひたすらな生、劇的な物語に重なったことで、前衛短歌のある部分への理解と共感が、非常にわかりやすい形で読者のなかに用意され、さらなる期待が生み出されていった。そのように前衛短歌との関係で捉えることも可能だろう。

（よねかわ・ちかこ「かりん」編集委員）

※次号は葛原妙子（小池光筆）です。